

会話データ分析の手法を学ぶための教材開発と授業実践

—『会話データ分析の実際－身近な会話を分析してみる－』における
教師と学生による「研究と実践の連携」の可能性—

中井陽子・大場美和子・寅丸真澄

キーワード：会話データ分析、教材開発、授業実践、「研究と実践の連携」、教師と学生

1. はじめに

普段我々が何気なく参加している会話とは何かを考える際、単に頭の中でどのような会話をしていたか内省してみるだけでなく、実際の音声や映像を記録した「会話データ」を詳細に観察・分析してることが有効である。中井（2012）では、談話分析、会話分析、ディスコース分析等、話し言葉の会話データを扱った様々な分析の総称を「会話データ分析」と呼んでいる。そして、「会話データ分析」の手法を学ぶことで、自身や他者の会話を客観的に観察する視点が養われるとしている（中井 2012）。そうして得た視点をもとに、大学・職場等の社会生活で自身が参加している会話を振り返り、様々な会話相手や個々の会話場面に応じたより良い会話参加とは何かを検討するといった、会話の改善方法を考えていくことが可能になると言える（中井 2008; 2009; 2010; 2012、大場 2013、中井他 2017 等）。こうした会話の改善方法を考える姿勢は、母語話者同士の母語場面、および母語話者と非母語話者による接触場面に関わらず、相手や場面に応じて話し方を調整していける調整能力や異文化コミュニケーション力を身に付けることに繋がると言えよう。

そして、会話データ分析の視点を得るためには、会話データ分析の基本的な枠組みを知るだけでなく、会話ビデオや文字化資料等の具体的なデータをもとに、実際に分析してみる体験が必要となる。だが、個々の教員が教材を1つずつ作成していくのは負担であると言える。

そこで、筆者らは2016年度より科学研究費補助金を得て、日本語教育分野を中心とした会話データ分析の多様な「研究」、および教材開発、授業実践を行って教材試用を重ねるといった「実践」を行いつつ、他の教員や学部・大学院等で学ぶ学生（日本人学生や日本語学習者等）と共有できる形で教材の公開を目指してきた。そして、『会話データ分析の実際－身近な会話を分析してみる－』（以下、『会話データ分析の実際』）というタイトルで教材としてまとめあげ、ナカニシヤ出版から2022年10月に出版した。本教材は、筆者らによる「会話データ分析の手法を学ぶための教育」における、教師と学生による「研究と実践の連携」（中井 2012）の積み重ねのプロセスが反映されていると言える。

本稿では、本教材の開発プロセスと授業実践がいかに起こっていたのかについて、教師と学生による「研究と実践の連携」のプロセスに当てはめて検討する。これにより、「会話データ分析の手法を学ぶための教育」における、教師と学生による「研究と実践の連携」の可能性を示すことを目的とする。以下、まず、本稿で重要概念となる、教師と学生による「研究と実践の連携」、および、会話データ分析を扱った教材開発の理念とプロセスについて述べる。次に、これらの概念

をもとに筆者らが行った、会話データ分析の教材『会話データ分析の実際』の開発、および、この試用版を用いた授業実践、教材の具体例、および学生による学びについて、4つの事例の報告を行う。これらをもとに、今後の会話データ分析を学ぶための教材開発の課題について述べる。

2. 教師と学生による「研究と実践の連携」

教師と学生による「研究と実践の連携」のプロセス（中井 2012）について、本稿で焦点を当てる「会話データ分析の教材開発と授業実践」という観点から説明する。このプロセスでは、教師だけでなく、学生も「研究と実践の連携」をさせることが重要となる。このプロセスの概念は、中井（2012）の日本語学習者のための「会話教育」のプロセスが元にある。中井（2012）では、より良い会話教育を行うために必要な日本語教師と日本語学習者による「研究と実践の連携」のプロセスについて提言している。そして、このプロセスは、日本語学習者だけに限らず、学部・大学院生等の学生全般に対する、より広い教育分野に置き換えて考えることができる。

図1は、学部・大学院等の学生（日本人学生、日本語学習者等）に向けた「会話データ分析の手法を学ぶための教育」における、教師と学生による「研究と実践の連携」のプロセスの関係を示したものである。

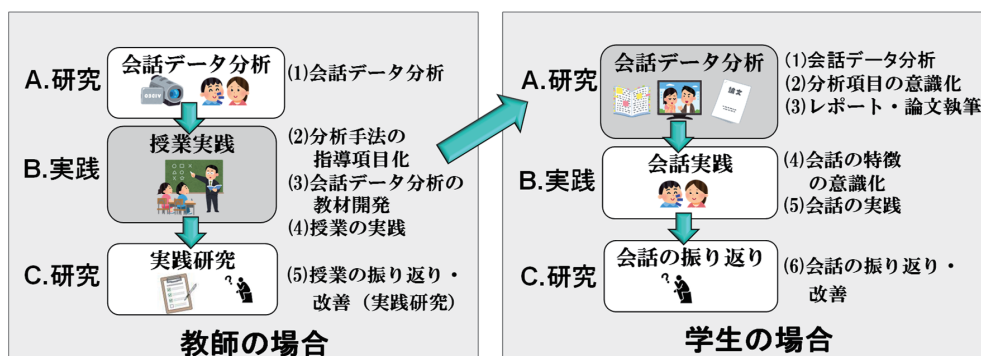


図1 教師と学生による「研究と実践の連携」のプロセスの関係
(会話データ分析の手法を学ぶための教育)

まず、教師による「研究と実践の連携」は、教師が(1) 様々な場面の会話データを分析し(研究)、そこから得られた会話の特徴を参考に、(2) 分析手法の指導項目をまとめ(実践)、(3) 会話データ分析の教材開発を行い(実践)、(4) その教材を試用して授業の実践を行う(実践)。そして、(5) その授業実践をデータとして分析をして振り返り、今後の改善を図り(実践研究)、次なる会話データ分析、教材開発に繋げ、発展させる。

一方、学生による「研究と実践の連携」は、学生が(1) 教師が作成した教材をもとに会話データ分析を行う(研究)。そして、(2) そこから得た分析項目を意識化し(研究)、(3) 会話データ分析の手法を用いたレポート・論文執筆を行って、研究力を磨いていく(研究)。さらに、(4) 会話データ分析から得た会話の特徴を意識化し(実践)、それをもとに、(5) 自身の会話の実践に活かし(実践)、その後、(6) 自身の会話がどうであったか、会話データ分析で得た視点から振り返り、今後の改善を図っていく(研究)というプロセスになる。

このように、教師が「研究と実践の連携」の循環プロセスにおいて開発した、会話データ分析の教材をもとに、学生が自身の「研究と実践の連携」のプロセスを行うこととなる。なお、ここ

でいう「研究」とは、学生が学術的な研究を行うことだけではなく、日々の生活の中で会話を観察していく分析的な視点を持ち、そこから会話の特徴を自律的に学んでいき（研究）、自身の会話に活かしていく（実践）という会話データ分析的な視点を持った姿勢のことを意味している。

3. 会話データ分析を扱った教材開発の理念とプロセス

筆者らは、これまで様々な会話データ（例：雑談、誘い、インタビュー、話し合い、体験談、面接、教室活動等）をもとにした分析を行い（大場 2012、中井 2012、寅丸 2017 等）、その成果を日本語教育、日本語教員養成・研修等の現場へ活かす試みを行ってきた（中井 2008; 2009; 2010; 2012; 2018a; 2018b; 2020; 2021a; 2021b、中井他 2015; 2017; 2021、大場 2013; 2021a; 2021b、大場・中井 2020 等）。その中で、日本語学習者や日本語教師を目指す者たちが会話データ分析の手法を学び、会話を客観的に分析する視点を獲得して、自律的に自身の会話を振り返り、改善していく重要性を指摘してきた。

このような会話を客観的に分析する視点を身に付けることが自身の日常の会話を振り返ることに繋がるという理念のもと、会話データ分析の基本的な手法が初学者の学生でも学べる教材『会話データ分析の実際』（中井他 2022）を開発した。そして、学生が日常生活で遭遇する様々な場面の会話データ（会話ビデオ、文字化資料）を実際に分析してみることで、自身の日常の会話でのコミュニケーションを振り返れるようにした。以下、本教材の開発プロセス、および特徴・構成について述べる。

3.1 会話データ分析の教材開発のプロセス

表1と表2は、本教材の開発のプロセスを、図1の教師と学生による「研究と実践の連携」のプロセス（会話データ分析の手法を学ぶための教育）に当てはめて説明したものである。これら教師および学生の各プロセスにおいて、それぞれ「A. 研究」、「B. 実践」、「C. 研究」の連携が行われている。

表1 教師による「研究と実践の連携」のプロセス

A. 研究	(1) 日常生活で遭遇する様々な場面の会話データを収集し、会話時の意識を確認するフォローアップ・インタビュー、および文字化を行い、様々な枠組みから分析を行う。そして、分析結果について学会発表や論文投稿を行い、他者からのコメントを得て、分析をより深める。
B. 実践	(2) 研究で得られた知見をもとに、分析手法の指導項目化を行い、 (3) 会話データ分析の教材開発を行い（分析枠組みの紹介、会話ビデオ、文字化資料、分析例等掲載）、 (4) それを用いた授業実践を行う。
C. 研究	(5) 授業実践で学生がどのような会話データ分析を行っていたかをデータとして収集し、それをもとに学生の学びを分析することで、授業を振り返り、授業と教材の改善を図る（実践研究）。

表2 学生による「研究と実践の連携」のプロセス

A. 研究	(1) 会話データ分析の教材を用いて、グループでタスクに取り組みながら分析・発表を体験し、会話データ分析の手法や分析例を学んでいき、各自、課題としてワークシート等に分析結果をまとめて提出することで、理解を深める。 (2) 会話を分析する視点を得て、分析項目の意識化をし、 (3) 自身のレポート作成、卒業論文、修士論文等の研究を行う。
B. 実践	(4) 研究で得られた知見をもとに、自身の日常生活での会話の特徴を意識化し、 (5) 実際の自身の会話参加に活かす。
C. 研究	(6) 自身の会話を振り返り、個々の相手や場面に応じた会話の改善を試みる。

3.2 会話データ分析の教材の目的・特徴・構成

まず、本教材『会話データ分析の実際』の目的は、日常の大学生活や社会生活で遭遇する場面の会話データ（会話ビデオ、文字化資料）について、学生達が実際に分析する体験を通して、基本的な分析手法を学ぶことである。そのために、段階的に様々なタスクにグループで取り組むことで、多角的な視点に触れながら分析の観点を深めていけるようになっていることが特徴である。さらに、学生達が分析した結果を振り返るタスクを通して、自身の会話を振り返り、個々の相手や場面に応じた会話の改善点を探り、今後の自身の会話に活かしていくことも目的となっている。これらをもとに、会話データ分析の手法を中心にして、調査・研究の基本的な方法や姿勢を学び、レポートや論文の執筆に繋げていけるようになっている。

次に、本教材の構成は、第1～10章から成る。まず、第1～9章では、初対面会話（母語場面、接触場面）、誘い、依頼、インタビュー、話し合い、留学の体験談、面接の会話といった多様な日常会話の場面を取り上げ、実際に会話ビデオと文字化資料を見ながら分析練習ができるように組み立ててある。会話ビデオは、QRコードまたはURLから何度も視聴できるようになっている。第2章には、グループで学生自身の会話を録画して自己分析するタスクも設けてある（中井2009; 2012; 2018a、中井他2015等を参考に作成した）。

さらに、第10章では、会話データ分析の研究計画から、先行研究の調べ方・まとめ方、調査の依頼、会話データの収集、分析、発表、レポート・論文作成の仕方について、具体例を参考にしつつ、段階を追ってタスクに取り組みながら学べるようになっている。学生が第1～9章で学んだことを発展させて、関心のある会話データを収集して主体的に分析を行い、発表、レポート・論文作成を行う中で発見したことを自身の会話に活かすといった「研究と実践の連携」を積極的に行っているようになっている。会話データの選定としては、学生が苦手意識のある会話や、うまく参加できなかった会話等、問題を感じている会話場면을思い起こして、データ収集することができる。

以下、『会話データ分析の実際』の「本書の使い方」、「本書における会話データ分析の導入概念・分析項目」で説明・提示している内容の概要を述べる。

表3は、本教材における会話データ分析の導入概念・分析項目の抜粋である。ここにある第1章、第4章、第9章、第10章の教材開発・授業実践例について、以下、4つの報告を行う（4.1～4.4）。

表3 本教材『会話データ分析の実際』における会話データ分析の導入概念・分析項目
(中井他(2022:vi-vii) 抜粋)

章	会話データ分析の導入概念・分析項目
第1章 初対面会話 (母語場面)の 話題転換の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・文字化表記方法 ・文字化資料の確認 ・話題区分の認定基準、話題タイトル付け ・話題開始部・話題終了部の特徴
第4章 誘いの ロールプレイ会話の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・誘いの展開構造(開始部、主要部、終了部) ・発話機能 ・誘いの駆け引き、配慮、言語行動・非言語行動
第9章 面接場面と 「聞き返し」の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き返しの発話意図による分類 ・面接場面での内容面、言語面、非言語面、社会文化的知識の違いの比較
第10章 会話データ 分析の研究計画から レポート・論文作成まで	<ul style="list-style-type: none"> ・レポートや論文の全体の構成(論文タイトル、研究の目的、先行研究、調査の方法、分析、考察、結論、参考文献) ・研究計画の立て方(論文タイトル、研究の背景、会話の場面・種類、会話参加者、会話データの収集方法、分析の観点、研究の意義・社会的貢献等) ・先行研究の書誌情報のまとめ方(検索・引用の仕方) ・調査の依頼の仕方(依頼書、同意書、説明文等) ・会話データの収集の仕方(準備、撮影、背景調査、会話感想シート、フォローアップ・インタビュー等) ・会話データの分析の仕方(データの管理、文字化資料作成、Excelの活用等) ・発表資料のアウトラインの書き方 ・レポートや論文の本文の書き方 ・提出前の確認事項(チェックリスト)

表4は、各章の構成・進め方である。各章には、「考えてみましょう!」、「やってみましょう!」、「確認しましょう!」、「会話データを分析しましょう!」、「分析を振り返りましょう!」等の様々なタスクが設けてある。各章で扱う会話データの参加者からは、本教材作成のための会話ビデオ撮影・公開、文字化資料公開、写真掲載等の承諾を得ている。また、本教材で提示する会話ビデオや文字化資料の中で、参加者の名前や所属等、個人が特定される情報は、仮名や消音、伏せ字にしてある。各会話の撮影後には、会話ビデオを視聴しながら会話時の意識を確認するフォローアップ・インタビューも各参加者に対して個別に行っている。これらのデータは、本教材のほか、本教材の参考文献に掲載した筆者らの論文等(ウイモンサラウオン・中井2017、中井2017a; 2017b; 2019、大場・中井2020、大場2021a; 2021b、寅丸2022、佐藤他2022等)の中でも、引用・活用している。

表4 本教材の各章の構成・進め方(中井他(2022:iii-iv) 抜粋要約)

章	タスク・項目	会話データ分析の進め方
第1～9章	考えてみましょう!	各章で取り上げる会話がどのようなものかについて振り返り、その特徴を意識化する。
	やってみましょう!	各章の会話をロールプレイで実際にしてみる。
	確認しましょう!	各章の会話データ分析に関する基礎的な知識を学ぶ。

	会話データを分析しましょう！	様々な場面の会話ビデオを見て、タスクに取り組みながら、多角的な観点から会話データを分析する。その後、個人やグループで各会話の特徴を分析し、発表や報告をする。
	分析を振り返りましょう！	会話データ分析を行った感想、さらに分析したい点、今後の自身のコミュニケーションで気を付けたい点を考える。これにより、分析の発展や、自身が参加している日常の会話の改善に繋げる。
	参考文献	筆者らが各会話データを実際に分析した論文等が載せてある。これらには、参考となる先行研究の情報や詳しい分析手法、分析結果等がまとめられており、さらに深い分析をする際の参考とする。
	関連する文献	参考になる主な文献の一部が紹介してある。
第10章	第1～10節	1つ1つのタスクに段階的に取り組みながら、個人やグループで会話データの収集・分析・発表・レポート・論文執筆を行う。

なお、本教材の会話データを用いて授業実践を行う際は、単にその会話の良し悪しや正しさを評価するといった短絡的な活動にならないようにする必要がある。会話データ分析を行う際は、会話の中でどのようなやり取りが起こっており、その結果どのようなようになったか、会話参加者がどのような意識で参加していたのか、自分ならどのようにするか等、会話で起きている現象を客観的に観察し、自身のことに引き付けて考えられるようにすることが重要であろう。そのためには、分析で重要となる点について学生が気づけるように、教師が適宜促していくことも必要であろう。

4. 会話データ分析の教材開発・授業実践例の報告

会話データ分析をもとにした、教師と学生による「研究と実践の連携」のプロセス（前掲図1、表1、2）の具体例として、筆者らが取り組んだ『会話データ分析の実際』の教材開発、および学部・大学院・日本語の授業実践の試みについて、以下、4つの報告を行う。4.1では初対面母語場面の会話データ分析（第1章）、4.2では誘いの会話データ分析（第4章）、4.3では面接場面の会話データ分析（第9章）、4.4では会話データ分析の手法を用いた卒業論文指導（第10章）について報告する。各報告では、教師がどのような問題意識のもと会話データの収集・分析・教材開発を行ったのか、そして、開発した教材を授業で活用することにより、学生のどのような研究と実践に繋がっていったのかについて、「研究と実践の連携」のプロセスに当てはめながら述べる。

4.1 初対面母語場面の会話データ分析（大場）

初対面母語場面の会話の教材開発・授業実践の例について、「研究と実践の連携」のプロセスの観点から述べる。

(1) 教師による「研究と実践の連携」のプロセス

A. 研究：

教師（大場）は、博士論文で接触場面と母語場面の知人関係の三者会話（女性）の分析を行い、話題開始や話題開始後のやり取りの不均衡な役割配分について研究を行った（大場2012）。これを踏まえ、教材開発のための研究では、接触場面と母語場面で人数（二者と三者会話）と人間関係（初対面と友人関係）に条件を加えた会話データを収集し、まず、初対面会話を対象に話題区

分を行い、話題開始と情報交換の分析を行った（大場 2021a; 2021b）。

B. 実践：

この分析結果を踏まえ、初対面会話で話題区分を行う教材を作成した（図2）。これは、南（1972）にあるように、会話を分析する際には談話の単位を考える必要があるという指摘を踏まえたものである。この教材のタスクでは、まず、「1. 考えてみましょう！」で、初対面会話に関して、どのような場面で、何のために、何について話すのかといった特徴や、会話がはずんだりうまくいかなかったりした経験について、学生が話し合う。次に、「2. 会話データを分析しましょう！」で、実際に初対面母語場面の会話ビデオを見て話題区分を行った上で、その話題終了部と開始部の特徴（内容、言語的・非言語的特徴）を記入する。文字化資料には話題区分を記入できる欄があり、話題が大きく変わった「大話題」と小さく変わった「小話題」の区分を行った上で、話題タイトル、区分した理由、話題開始部と終了部の特徴を記入し、グループでその結果について話し合う。そして、「3. 分析を振り返りましょう！」で、分析結果をまとめて今後の研究や日常生活にどのように活かすのかを考察する。最後に、今後の学習に繋がるように「関連する文献」のリストを確認できるようにしてある。

話題区分の教材は、学部3年生の学生を対象とした、いわゆるゼミの授業（例年12名まで）で活用した。本授業は、会話データ分析の手法を学びながら、4年生の卒業論文執筆のためのアカデミック・スキルも習得することを目的とする授業である。授業では、教材の流れに従い、これまでの初対面会話の経験について学生に話し合わせて導入を行った。その後、会話ビデオ（10分程度）を一度視聴して話題区分を個人の直感で行った上で、その結果を3～4名のグループで持ち寄り、話題区分の基準をすり合わせるよう指示した。

第1章 初対面会話（母語場面）の話題転換

1. 考えてみましょう！
（略）

2. 会話データを分析しましょう！
（略）

会話データの設定：
初対面の会話、場面、現代が会話しています。3人とも同じ大学の学生ですが、学年や専攻は異なります。3人には特別に関わりを持たず、自由に話すようお願いしました。会話は20分程度でしたが、文字化資料と会話ビデオは質問の7分程度です。

会話データの設定：
初対面の会話、場面、現代が会話しています。3人とも同じ大学の学生ですが、学年や専攻は異なります。3人には特別に関わりを持たず、自由に話すようお願いしました。会話は20分程度でしたが、文字化資料と会話ビデオは質問の7分程度です。

七海 日本語日本文学（専門：日本語学）
柳原 国文学部（専門：国文学）
夏代 現代教育学科（専門：都市社会学）

タイトルの記入
・大話題のタイトル
・小話題のタイトル

話題の切れ目を記入
・大話題：二重線
・小話題：一重線

話題タイトル	話題の切れ目	番号	発話者	発話
		1	七海	じゃあ今日はお願いし【まーす
		2	柳原	【お願いしまーす
		3	夏代	【お願いしまーす

（略）

20	柳原	あ、なん、なんか悪文って
21	七海	うん
22	柳原	結構いろんなジャンルがあっって一考古学だったりとかももちろん
22	柳原	日本史西洋史なんですけど、私は西洋史が好きで、
22	柳原	さらに美術が好きなんで、西洋美術史をー
23	夏代	あー
54	柳原	現代は↑
55	夏代	現代はー【(変)
56	柳原	【(変)
57	七海	色々何でも【やるって感じ
58	柳原	【(変)
59	夏代	【そうそうそうそう
173	柳原	日又は何してるの！
174	七海	日又はー
175	柳原	うん
176	七海	なんか、すごいイメージとして文学やってそうないイメージ
177	柳原	うん
178	夏代	うんうん

3. 分析を振り返りましょう！
（略）

関連する文献
（略）

図2 初対面母語場面の話題区分の教材（第1章）

C. 研究：

授業での実践を踏まえ、教師は、学生の話題区分の傾向を分析し、研究発表を行った上で、論文投稿（大場・中井 2020）を行った。学生の話題区分は、話題終了部と開始部の特徴をつかんでいながらも（例：新規情報の有無、談話標識、情報提供、質問表現、繰り返し、評価的発話、声の調子等）、区分自体にはかなりばらつきが観察された。よって、学生が迷い過ぎずに話題区分ができるよう、話題がより明確に区分しやすい会話例（三者会話）に差し替え、教材を修正した。

— 165 —

(2) 学生による「研究と実践の連携」のプロセス

A. 研究：

学生は、日常生活の経験から、話題が大きく転換したり、少しずつ関連する話題が展開していったりするイメージは持っていたが、実際に個々の話題に区分することが実は難しいということを実験活動で学んだ。特に、話題をどこまで細かく区分するかという判断に迷いが生じていた。例えば、大きく留学の話題として区分するのか、留学中の授業や生活等についての話題をそれぞれ細かく区分するのか、という判断である。個人の直感による区分の結果をグループで話し合うタスクでは、自分がなぜそこで区分したのかを根拠とともにメンバーに説明を行いつつ、グループ内で区分をすり合わせていった。学生は、話題区分のすり合わせの話し合いにより、根拠を踏まえた意見の述べ方に加え、他者の意見を聞きつつ判断基準を修正・決定していくプロセスも体験していたと言える。よって、このプロセスでは、授業の目的である卒業論文執筆の際に必要なとされる意見の主張や判断基準の明確化といったアカデミック・スキルを学んでいたと言える。

学生は、初対面会話の話題区分の活動後、さらに、初対面会話の話題に関する研究論文（三牧 1999a; 1999b、中井 2002、奥山 2005、楊 2005）を講読し、接触場面や母語場面の話題終了部と開始部の特徴、話題開始の方法、情報交換について、多様な分析事例を学んだ。そして、実際にゼミの学生たちで自由会話を収集し、自分たちの会話データを共同で分析する活動を行った。話題区分の活動を体験した学生は、文献中の「全〇会話を収集し、文字化した」「話題区分の一致率は〇%である」という1行程度の記載の作業が、いかに労力を要するのか、実感を持つことができたようである。

B. 実践：

「3. 分析を振り返りましょう！」では、今後の初対面会話で気を付けたい点、会話データを分析する際に気を付けたい点について、学生がワークシートに記述した。以下の記述のように、初対面会話に関しては、会話ビデオで3人の参加者が情報交換を比較的均等に行っている様子を観察し、自身も質問等をしながら参加者間で話をまわしていきたい等の記述がみられた。話題区分の活動に関しては、大小の区分に迷った結果、基準を明確にすることが重要だと気が付いたという記述が多くみられた。

- ・できるだけ質問をすると話がまわりやすい。
- ・自分だけ話すのではなく、相手の話を聞ける人になりたい。
- ・自分が話すときは要約してなるべく分かりやすく話す。
- ・話題区分を行う際は、基準を明確にする。

4.2 誘いの会話データ分析（中井）

誘いの会話の教材開発・授業実践の例について、「研究と実践の連携」のプロセスの観点から述べる。

(1) 教師による「研究と実践の連携」のプロセス

A. 研究：

教師（中井）は、まず、学生が日常生活で遭遇するであろう誘いの会話をデータとすることにした。そして、普段から演じ慣れている演劇部の学生に頼んで、部活の同期同士（女性－女性）、

後輩－先輩の間（男性－女性）で遊園地に誘うという場面（承諾の場合と断りの場合の両場面）をロールプレイで収集した。

次に、その会話データをもとに、教師が誘いの展開構造や言語行動、非言語行動、言いさし発話、男女間の駆け引きについて、参加者の会話時の意識も参考にして分析を行い、研究発表、論文投稿を行った（ウイモンサラウオン・中井 2017、中井 2017a）。分析の際は、言いさし発話の修士論文を執筆予定の大学院生とともに、教師が誘いにおける言いさし発話の共同研究を行い（ウイモンサラウオン・中井 2017）、その後、教師単独で誘いの会話の構造展開における駆け引きについて、さらに詳細な分析を行った（中井 2017a）。

B. 実践：

これらの研究をもとに、誘いの分析の枠組みを学べる教材を作成した。この教材では、まず、「1. 考えてみましょう！」で、学生が普段どのような時に誘いをするか、どのようなことに気を付けて誘うか等について話し合う。次に、「2. やってみましょう！」で、友人を遊園地に誘うロールプレイ会話（承諾、断り）をしてみて、承諾と断りのロールプレイ会話の特徴や違い、話す内容や順番、難しさ等について振り返る。そして、「3. 確認しましょう！」で、「誘いの会話の展開構造」の一覧表（ウイモンサラウオン・中井 2017）を見て、その定義・発話例を確認する（図3）。この一覧表には、誘いの会話の「開始部－主要部－終了部」、および「主要部」の中の「先行部」、「誘い部（勧誘部、事情説明部、事情確認部、都合確認部、承諾部、断り・弁明部、相談部）」、「終結部（前終結部、関係再確認部）」という区分が示してある。

3 確認しましょう！

(1) 誘いの展開構造

誘いの会話は、始まりから終わりまで、会話参加者の間でやり取りが行われながら、段階を踏んで進んでいきます。こうした会話の流れ・話す内容の順番を「展開構造」といいます。誘いの会話は、表4-1のような「展開構造」で行われます。通常、「開始部－主要部－終了部」の順番で進みます。そして、「主要部」はさらに「先行部－誘い部－終結部」という順番で進むことが多いですが、「誘い部」「終結部」の中の順番や種類は誘いの会話によって異なることがあります。

表4-1 誘いの会話の展開構造（ウイモンサラウオン・中井（2017, p.144）をもとに作成）

誘いの会話の展開構造の各段階	定義	各段階に現れる発話例		
開始部	挨拶・雑談部	会話を開始する挨拶や雑談などを行う段階	あ、おはよう。／やっほー。／久しぶり。／早いねー。／授業？	
主要部	先行部	誘いの予告や、会話時間の有無を確認する段階	ちょっとお話がありましてですね。／お誘いなんですけど。	
	誘い部	勧誘部	誘いの表現を用いて誘う段階	ディズニーランド行かない？／行かない？
		事情説明部	誘いに至ったきっかけや事情を説明・確認する段階	ねえ、そう言えばさっきテレビで見たんだけど、／なんかチケット2枚手に入って、／なんで突然ディズニーランド？／他に行く人いないの？
		事情確認部	誘いの日時や場所が適当か確認する段階	今週の日曜とか空いてたりする？／日曜ちょっと遊ぶ約束してるんで。
		都合確認部	誘いを受け入れる段階	全然空いてる。／行きたい、ディズニーランド。
	断り・弁明部	断り	誘いを断る、また、その理由を述べる段階	行けないや。／バイトだよー、それ。／今月がさ、お金全然ないんだよ。
相談部		会合場所・時間の決定を行う段階	何時からにする？／入場料いくらだっけ？／近くなったらまた連絡でいいかな。	
終結部	前終結部	誘いの会話の終結を示唆し、それに同意する段階	よしよし。／うん、オッケー。／あー、よかったー。／予定合わないね。	
	関係再確認部	今後の良好な関係の継続を互いに確認し合う段階（感謝、謝罪、将来の接触への言及など）	またの機会に行きますか。／なんかごめんね。／俺も行きたいっすけどね。	
終了部	別れの挨拶部	会話を終わらせて別れるための挨拶を行う段階	じゃあ、ちょっとそろそろ行かなきゃだから。／じゃあねー。／お疲れ様です。	

図3 誘いのロールプレイ会話の分析の教材「3. 確認しましょう！」（第4章）

これらを踏まえ、「4. 会話データ分析をしましょう！」で、誘いのロールプレイ会話のビデオを見て（2分程度）、分析を行う。この会話ビデオは、演劇部の後輩男性のS（大学2年生）が先輩

女性のT(大学4年生)を遊園地に誘い、断られるという設定でSとTに即興で演じてもらったものである。分析では、会話ビデオを見ながら、誘いと断りの駆け引きの仕方(例:情報の示し方・引き出し方、誘い方、断り方、受け止め方等)、相手への配慮の仕方(例:条件提示の仕方、相手の負担軽減の仕方等)、言語行動、非言語行動、展開構造等についてメモをしていく。そして、「誘いの展開構造」の一覧表を見ながら、会話ビデオの文字化資料をもとに、誘いのロールプレイ会話の展開構造を分析し、「開始部」「主要部」「終了部」等を認定・区分していくタスクが設けてある。

図4は、「4. 会話データ分析をしましょう!」の教材例である。誘いの会話の文字化資料の左横に、誘いの会話の展開構造の解答例(「開始部(挨拶・雑談)」、「主要部(先行部、誘い部:都合確認部)」)を示した。学部授業でこれらの展開構造の分類を学生が実際に行ったところ、例えば、枠線で囲ったような発話の部分で、切れ目が分かれる場合が見られた。ここでは、14S:「てか」を見落として、前の部分に入れていた学生がいたが、「てか」は、文構造的にもその後の16S:「～空いてたりします?」とまとめた方がよいため、14Sから「誘い部」の切れ目にした方がよい等、どこから展開構造のまとまりが始まっているのか、教師からヒントを与えながら、学生同士、グループで検討を行うようにした。

誘いのロールプレイ会話：S(祥禧), T(多惠) (00:03～2:13) (中井, 2017, pp.114-121)		
展開構造	発話	発話機能
開始部	1T: 久しぶり。(笑い)	関係作り・礼儀
	2S: あ、お久しぶりです。	注目要求, 関係作り・礼儀
	3T: はい。	同意の注目表示
	4S: やー。(椅子に座る)	注目要求/自己注目表示
	5T: あれ、授業?	情報要求
主要部	6S: いや、(壁掛け時計を見上げる) 今ないです。	注目表示, 情報提供
	7T: あ、そうなんだ。(壁掛け時計を見上げる)	確認の注目表示
	8S: 次、あるんですけど。	情報提供
	9T: あ、そっか。	確認の注目表示
	10S: うーん。(2) (下を向く)	自己注目要求
	11T: ん?	言い直し要求
	12S: (Tを見て両手をさすりながら) ど、どうですかね。	情報要求
	13T: (眉毛を上げて) え?	言い直し要求
	14S: (2) てか、	談話表示
	15T: うん。	継続の注目表示
	16S: 多惠さん今週の日曜日って、空いてたりします?	情報要求
	17T: 今週の日曜? (笑い)	確認の注目表示
	18S: はい。	同意の注目表示
	19T: 今週の日曜? (笑い)	確認の注目表示
	20S: はい、//今週の日曜。(両肘を後ろの椅子と机に載せる)	同意の注目表示
	21T: 今週 (後傾姿勢で上を見る) の日曜。は、予定確認しないと分かんないけど、と、多分 (前傾姿勢に戻る)、多分空いてる。確か。	情報提供
	22S: //ほんとですか。	感情の注目表示
	23T: 確か空いてると思う。うん。	情報提供, 自己注目表示

図4 誘いのロールプレイ会話の分析の教材「4. 会話データ分析をしましょう!」(第4章)

最後に、「5. 分析を振り返りましょう!」で、今回の「誘いのロールプレイ会話」の分析の感想、さらに分析したい点、今後の自身のコミュニケーションで気を付けたい点について、学生が振り返ってコメントを記述するようにした。

C. 研究:

誘いの会話の教材を用いた授業について、学生のワークシートの記述を分析し、実践研究としてまとめ、学会発表、論文執筆を行った(中井2018a等)。その結果、学生が誘いの会話の展開構造、配慮の仕方等を意識化し、自身の誘いの仕方を振り返り、今後に繋げようとしている様子が見られた(以下、(2) A. 研究、B. 実践に詳述)。また、教師は、より深く会話データを分析できるように、誘いの会話の展開構造だけでなく、1つ1つの発話の「発話機能」の概念も導入す

る必要性を感じ、ザトラウスキー（1993）等の代表的な発話機能の種類と定義とその例も教材に追加することとした。

(2) 学生による「研究と実践の連携」のプロセス

A. 研究：

学生は、学部の会話データ分析の手法を学ぶ授業において、誘いのロールプレイの会話をもとにした教材を用いて、会話データ分析を行った。この授業の学生としては、日本人学部生のほか、外国人留学生も参加していた。学生がワークシートに記述した内容（中井 2018a）を見ると、まず、誘いの会話の分析によって、誘いの会話の展開構造を意識化している様子が見られた。そして、誘いの会話ビデオを実際に分析してみると、「展開構造」が整然と区分されているのではなく、会話参加者間のやり取りの中で動的に変化していくという点にも気づいていた。また、誘いと断りを行う際の「言語・非言語行動」からうかがわれる会話参加者の「配慮・意図」についても考える機会となっていた。さらに、多様な言語・文化の学生がグループで分析結果について話し合うことで、日本語とその他の言語での誘いの仕方の違い等、新たな気づきを得ている様子も見られた。その他、日本語教師を目指す学生は、誘いの会話の特徴について日本語教育でいかに取り入れられるかまで検討している者もいた。

B. 実践：

学生は、誘いの会話の分析を行うことで、自身の普段の誘いの会話の仕方を振り返り、今後の誘いの仕方の参考にしようとしていた。学生がワークシートの「5. 分析を振り返りましょう！」に記述した内容を見ると、「今後気を付けたい点」として、以下のように、実際の会話の中でも誘い方や断り方に注意したい、自分や他者の非言語行動や配慮の仕方等に留意していきたい等の記述が見られた（中井 2018a:213）。ここから、学生が授業で分析したことを今後誘いの会話に参加する際に活かそうとしていたと考えられる。

- ・ 授業を通して、誘うのは勇気がいることと改めて確認したので、今後何かを断るときは単に断る、謝るだけでなく「誘ってくれてありがとう」と言えるといいのかなと思った。
- ・ 「言語に関わらず断るときは上を向いたり、下を向いて視線をそらす」という指摘があったので、自分の実際の会話で観察してみたい。また、思っていることをはっきりと言わなかったり、思っていることと違うことを言ったりする相手への配慮が見られたので、実際の会話でも自分や相手が実践しているか気をつけて見てみようと思った。
- ・ 相手の非言語の行動にも注意しつつ、相手に配慮することを心がけたい。
- ・ もし自分が先輩を誘う側になったら、あの動画の後輩くんのように、何とも煮えきらないことを言ったり、押しが強いんだか弱いんだか分からないことを言ったりしてしまうと思う。円滑な「誘い」のコミュニケーションができるよう、「勢い」を大事にしたい。

4.3 面接場面の会話データ分析（寅丸）

面接場面の会話の教材開発・授業実践の例について、「研究と実践の連携」のプロセスの観点から述べる。

(1) 教師による「研究と実践の連携」のプロセス

A. 研究：

教師（寅丸）は、博士論文において日本語学習者（以下、学習者）の自己形成や自己実現を支援することを目的とした教室談話研究（寅丸 2017）を行い、それを機に、学習者のキャリアに関わる研究（寅丸他 2020 等）にも関心を持つようになった。そのため、教材開発の研究では、面接の会話における「聞き返し」を取り上げた。「聞き返し」とは「相手が聞き取れない、分からないという問題に直面し、それを解消するために相手に働きかける方策」（尾崎 1992:252）である。そのため、聴解能力の低さを示す指標ともなり、学習者が使用を避けたいと考える傾向がある。しかし、必要な箇所では「聞き返し」を行わなければ、会話の文脈に合わせて応答することが困難になり、逆に学習者の日本語能力に対する評価を下げることにもなる。特に、就業に関わる面接場面では、日本語能力のみならず、誠実さに対する評価も下げる懸念もある。一方、重要なストラテジーであるものの、日本語教育分野における「聞き返し」の研究は、これまで日常会話における初級学習者と上級学習者の会話が取り上げられる傾向があり（尾崎 1992; 1993、尾崎・椿 2001、大野 2001 他）、就業などの公的場面における中級学習者の「聞き返し」についての知見は少ない。そこで、就業に関わる面接場面における中級学習者と上級学習者による「聞き返し」に着目した。

教師は、まず、インターンシップの面接場面を設定し、面接官 2 名と日本語学習者 1 名によるロールプレイ 2 本（10 分程度、8 分程度）を収録した。面接官役は日本語母語話者の男女 2 名（社員 1、社員 2）であった。面接対象者は上級と中級の中国人学習者（A 氏、B 氏）各 1 名であり、いずれも収録当時は都内大学の大学院生、役柄は大学生であった。収録した音声データは文字化し、「聞き返し」部分を抽出した。次に、全体の発話量と「聞き返し」の出現頻度、「聞き返し」連鎖の実態を分析した。さらに、抽出した「聞き返し」を発話意図による分類（尾崎 1993）に従って 6 種（「①反復要求」「②聞き取り確認要求」「③説明要求」「④理解確認要求」「⑤反復/説明要求」「⑥聞き取り確認要求/説明要求」）に分類した。分析結果から、中級学習者 B 氏は、上級学習者 A 氏より発話数が少なく話題を深めることができなかったこと、「聞き返し」の出現頻度が高かったこと、「聞き返し」連鎖が長く失敗する確率が高かったこと、「聞き返し」で使用されている待遇表現に問題があることが明らかになった。そして、分析結果を学会において報告した（寅丸 2020）。

B. 実践：

分析結果から、初級学習者同様、中級学習者に対しても「聞き返し」教育の必要性が示唆された。特に「聞き返し」は様々な意図からなされるため、学習者にとっては、「聞き返し」の多様な意図を理解し、文脈に合わせて効果的に使えるようにすることが重要である。そのため、面接場面の「聞き返し」について分析する教材を作成した（図 5）。本教材では、「1. 考えてみましょう！」で「聞き返し」の現象に気づかせ、「2. 確認しましょう！」で「聞き返しの発話意図による分類」を学習させるようにした。「3. 会話データを分析しましょう！」では、実際の会話データで「聞き返し」の分類を行った後、内容面・言語面（質問に対する応答の仕方、聞き返し）、非言語面（目線、うなずき、笑い、表情、手振り、音調、姿勢、態度等）、面接の社会文化的知識（期待される回答内容への準備）の観点から、良い点や不十分な点・改善方法を検討させるようにした。最後に「4. 分析を振り返りましょう！」では、分析の感想、さらに分析したい点、今後の自身のコミュニケーションで気を付けたい点について書かせるようにした。そして、その教材を中

上級学習者向け日本語科目の授業で試用した。

1 考えてみましょう！

(1) どのような時に面接を受けるでしょうか。
 (2) どのようにすれば面接で円滑なやり取りができるでしょうか。
 (3) 次のような場合、どのように会話を続けますか。

例 (1) 「XXXXですか？」と言われましたが、相手の話し声が小さくて聞き取れませんでした。
 例 (2) 「田中さんのザユウノメイは何ですか」と面接で聞かれましたが、「ザユウノメイ」という言葉が分かりませんでした。
 例 (3) アルバイトの面接で「好きなことは何ですか。また、それを通して学んだことは何でしょうか」とあまい質問をされました。

2 確認しましょう！

私達は、相手の話が聞き取れない時や分からない言葉があった時、また、相手の発話意図が理解できなかった時などに、「聞き返し」をします。「聞き返し」には、発話形式による分類や、表9-1のような発話意図による分類があります。

表 9-1 聞き返しの発話意図による分類 (尾崎 (1993) をもとに作成)


分類	定義	例
1. 反復要求	聞き取れなかった言葉の繰り返しを求める。	もう一度言ってください。
2. 聞き取り確認要求	自分が聞き取ったことが正しいか確認する。	「ザユウノメイ」ですか。

3. 会話データを分析しましょう！

タスク1

2つの接触場面のインターンシップ面接のロールプレイ会話のビデオを見て、表の1～6の分類のうち、どの「聞き返し」が行われているか考えましょう。また、あなたなら、どのような「聞き返し」をするでしょうか。

(1) インターンシップ面接A



設定：
 留学生A (チョウ、学部2年生) がコンサルティング会社のインターンシップ面接を受けています。
 面接官は社員2名です。

社員1、社員2 留学生A (チョウ)

会話例(1) 留学生A (チョウ) (6:10～)

161 社1: とですね、個人的な会話になるかもしれないんですけども、
 162 留A: はい。
 163 社1: 座右の銘とかついでに何かありますか？
 164 留A: 「ザユウノメイ」、 聞き返しの種類【 】
 あなたならどう聞き返すか【 】

図5 面接場面の「聞き返し」の分析教材 (第9章)

C. 研究：

以上の実践によって、学習者に「聞き返し」を意識化させる必要があること、および、学習者がデータを分析する上で2つの問題があることが明らかになった。1点目は、本教材では学習者の混乱を避けるため、「聞き返し」の表現形式に言及せず、話し手がどのような意図で発話したのかという発話意図による分類を採用していたため、「聞き返し」の分類に複数の解釈が生まれやすいという問題であった。解釈に正解はないものの、学習者の理解をさらに深め運用を促すためにも、発話意図に加え、質問表現や繰り返し表現といった表現形式にも言及する必要性が生じた。2点目は、会話データの分析対象者が少ないため、「聞き返し」の種類における中級・上級学習者の相違点が判断しにくいという問題であった。

本教材を用いた実践で明らかになった問題点を改善すべく、寅丸 (2022) において次の2点の調整を行い、会話データをより詳細に分析し直すこととした。1点目は、「聞き返しの発話意図による分類」に加え、表現形式を分析対象に加えたことである。尾崎 (2001) および許 (2013) の分類を踏まえて再分類し、新たな面接場面の会話データの分析に使用した。2点目は、分析対象者を増やし、データ数を拡充したことである。都内大学の大学院に在籍する中級・上級学習者各1名を加え、計4名のデータを分析対象とした。さらに、これらのデータの拡充から、「聞き返し」連鎖の分析が可能となり、中級・上級学習者の「聞き返し」戦略の相違点を「聞き返し」の発話のみならず、連鎖の面からより詳細に分析することが可能となった。

以上の再分析から、上述の分析結果に加え、中級学習者が音声面での「聞き返し」をした後に意味面での「聞き返し」をさらにするという二段階での意味交渉が必要になるのに対して、上級学習者は意味面からの「聞き返し」のみで済むことが分かった。また、中級学習者は確認を目的とする「聞き返し」と「聞き返し」連鎖が上級学習者より円滑に構成できず、「聞き返し」連鎖が長く続くことが明らかになった。さらに、上級学習者も中級学習者も、就業に関わる面接において頻出する質問 (例:「座右の銘」等) や語彙・表現について、社会文化的な理解が十分でないことから意味交渉の問題が生じる傾向が高いため、その理解を深める重要性が示唆された。

また、発話意図と表現形式の双方に留意した再分類の結果は、「聞き返し」についてより深く学

習したい学習者向けに、本教材の「注」に加筆した。本教材は、中級日本語学習者から日本語母語話者まで多様な学習者の使用が想定されていたため、それぞれの段階に応じて学習内容が調節できるように段階的に情報を提示するようにした。

(2) 学生による「研究と実践の連携」のプロセス

A. 研究：

本教材は、異文化間コミュニケーションの観点から日本語の特徴を学習する中上級学習者向け日本語科目で試用した。本科目の目的は、日本語と母語の言語運用の違いを比較しつつ、多様な場面における日本語を学習することであった。学習者は、就業に関わる面接を受ける機会が少なく慣れていなかったこと、また、ビデオの大学生役が自身と同様の学習者であり親近感が持てたことから、本教材の内容に興味を持って分析に取り組んでいた。また、普段は、いかに「聞き返し」を失礼のないように行うかという待遇面に意識が向き、「聞き返し」の発話意図まであまり意識したことがなかったため、「聞き返し」ストラテジーについて発話意図の観点から深く考える機会となったようである。授業では、待遇的な配慮の必要性は当然ながら、特に面接官の質問への適切な応答が重要であることを確認し、グループで「聞き返しの発話意図による分類」を行ったが、解釈の観点によって複数の回答の可能性が示され、検討することとなった。

B. 実践：

就業に関わる面接を予定している学習者のみならず、他の学習者にとっても、「聞き返し」のストラテジーについて意識化し、表現形式や発話機能について理解を深めることは、有効であったと言える。学習者は、「聞き返し」という言葉すら聞いたことがなかったが、「聞き返し」の意味や使い方が分かった」「学習したことが日常生活の中で役立つと思う」という感想を述べた。但し、「聞き返し」を行うことの抵抗感や緊張感はまだ拭えず、特に面接場面では、自身の日本語力を低く評価されないために「分かったふり」をしたり、「聞き返し」のタイミングがつかめずに使えなかったりすることがあるかもしれないという懸念も語られた。今後は、授業外での実際使用を通して、慣れと自信をつけていくことが重要であると考えられる。

4.4 会話データ分析の手法を用いた卒業論文指導（大場）

卒業論文指導の教材開発・授業実践の例について、「研究と実践の連携」のプロセスの観点から述べる。

(1) 教師による「研究と実践の連携」のプロセス

A. 研究：

教師（大場）は、母語場面や接触場面の自由会話、外国人労働者の就労場面の会話等の会話データ分析を行い、その研究結果を日本語教育や日本語教員養成でどのように活かすかを考察してきている。これらをもとに、学会発表や論文執筆を行い、この過程で他者からのコメントを得て、分析をより深めるといったアカデミックな研究活動を行ってきた（大場 2012; 2013; 2019、大場・中井 2020、大場 2021a; 2021b、吉田・大場 2020、等）。

B. 実践：

教師（大場）は、これまで行ってきたアカデミックな研究活動をもとに、学生が会話データ分

析の手法を学んだ上で、自らの関心をもとに研究課題を立てて分析活動を行い、卒業論文を執筆するまでのアカデミック・スキルの指導を2007年度から行ってきた。

授業では、まず、論文の全体の構成（論文タイトル、研究の目的、先行研究、調査の方法、分析、考察、結論、参考文献）を学生に提示し、卒業論文の全体像と1年間の執筆のスケジュールのイメージを持たせた。その上で、関心のある日常会話の現象に関して、研究課題として捉え直して発表させた後、論文の全体の構成に従って研究計画を書かせた。日常生活のやり取りを研究課題として、その結果明らかになった知見を自身の日常生活で活かすことは、学生による「研究と実践の連携」のプロセスで重要な点であり、これは教師が担当するどの授業でも常に指摘してきたことである。そのため、卒業論文執筆の際も、再度このプロセスを意識化させたいと考えていた。さらに、研究計画をもとに先行研究の検索方法のアドバイスをを行い、その先行研究のまとめ方を指示した。その上で、先行研究を踏まえて具体的にどのように調査をするか計画を立てさせ、実際に調査を行う際のアドバイスをを行った。調査後の分析では、分析結果を分かりやすく相手に提示するための発表資料の作成や本文の書き方を提示した。

学生の発表時には、発表内容に加え、発表者の意図が伝わっているかどうか、分かりやすいかどうかについて互いに意見を述べるよう指示した。そして、1年間で複数回、学生に研究経過について発表させて論文を加筆修正させていき、最後の論文提出前に、レポートの自己・他者チェックリストを見ながらお互いの論文に問題がないか確認するよう指示した。

こういった一連の授業活動の過程において、学生の卒業論文執筆の段階に応じて、その都度教材を作成して配布し、アカデミック・スキルの指導を実践してきた。そして、これらの個々の教材を、「第10章 会話データ分析の研究計画からレポート・論文作成まで」という1つの章にまとめて再教材化した。これにより、他の教育現場でも広く活用できることを目指した。

(2) 学生による「研究と実践の連携」のプロセス

A. 研究：

学生の卒業論文の研究課題は、これまで授業で行ってきた会話データの分析活動を踏まえ、人間関係、人数、性別等の条件を変え、日常生活で関心を持った会話を対象として、その特徴を明らかにしようとするものであった。具体的には、友人関係の会話、初対面から知人関係になるまで期間をおいて収集した会話、幼馴染み同士の会話、先輩と後輩の会話、二者や三者以上の多人数会話、男女の会話、芸能人のバラエティー番組の会話等、多様である。表5は、これまでの卒業論文タイトルの例（2007年度～2021年度）を、中井他（2017）の会話データの種類別に挙げたものである。

表5 会話データの種類の卒業論文タイトルの例

会話データの種類	卒業論文のタイトル
1. 自然談話	a. 内向的な人が行う情報提供とその方法の分析－初対面から顔見知りの会話を対象に－ b. 友人2人と初対面1人の三者間会話の展開の分析－情報交換と談話技能に着目して－ c. 女子大学生のビデオ通話に見られる話題選択と話題導入の分析－初対面会話と友人会話の比較－
2. メディア	d. 乙女ゲームにおける男性キャラクターが使用するポライトネス・ストラテジーの分析 e. 関東と関西のジャニーズタレントはゲストにどのように話すか－「嵐にしやがれ」と「関ジャニの仕分け∞」を比較して－ f. トーク番組での三者会話における聞き手の役割の違いについて－マツコ・デラックスと有吉弘行を比較して－ g. 不満を感じた謝罪会見の分析－謝罪の要素・釈明のタイプと非言語行動の観点から－ h. 東京都知事の新型コロナウイルス感染症に関する記者会見の特徴の分析－情報伝達における構成と展開に着目して－
3. 実験 (ロールプレイ、 談話完成法)	i. 教育相談の場面の傾聴のストラテジーの分析－教職課程の大学生のロールプレイを対象に－ j. 男女カップル間の不満表明ストラテジーについて－談話完成法による現実と理想の比較－ k. 告白メッセージに対する断りの分析－会話の使用言語と母語による違いに着目して－
4. コーパス	l. 会話への参加を示す談話技能の分析－初対面・友人会話を比較して－(BTSJ 日本語自然会話コーパス使用)
5. SNS	m. Twitter における不同意の伝え方－匿名・記名の違いに着目して－ n. 男性の LINE による複数回の勧誘に対する女性の「断り」の分析－年齢差に着目して－

B. 実践：

学生からは、卒業論文執筆時や卒業後に、会話データ分析を自身の生活で活用しているという報告が寄せられている。例えば、共学の経験がなく男性との会話が不安であるためにカップル間の不満表明(表5 j)を分析し、男性との話し方が分かって安心したという報告もある。また、4年次の就職活動中には、就職活動の面接やグループ・ディスカッションで自分や他者の話し方を冷静に観察したという体験談が多く聞かれる。そして、面接の際は、「会話データ分析」を面接担当者が知らないため、卒業論文で扱っている会話データ分析の説明をしたところ、関心を持ってもらえたという報告もある。あるいは、ゲームの会話の分析(表5 d)をして実際にゲーム関連会社に就職したという報告もある。さらに、国語の教育職員免許状の取得を目指していた学生が卒業論文で扱ったカウンセリングの場面の分析(表5 i)をもとに、卒業後、就職した教職の現場で生徒とやり取りをしているという報告もある。その他に、学部の会話データ分析の授業に参加したり、接触場面に関する卒業論文の課題に取り組んだりすることで、そこで得た知見が就職後に職場の外国人職員や顧客とのやり取りに役立ったという声も聞かれる。自分自身で収集した接触場面の会話データを分析することで、異文化間コミュニケーション力を向上させ、それをさらに社会で活用していくことにも繋がっているものと考えられる。このように学生達は、卒業論文執筆のプロセスにおいて、会話データ分析の手法を用いて「研究と実践の連携」の循環を辿ってきていると言える。

5. まとめと今後の課題

以上、会話データ分析の手法が学べる教材『会話データ分析の実際』（中井他 2022）の開発プロセスと授業実践について、教師と学生による「研究と実践の連携」の可能性という観点から述べた。特に、会話データ分析をもとにした、教師と学生による「研究と実践の連携」のプロセスの具体例として、筆者らの教材開発、および学部・大学院・日本語の授業実践の試みについて、4つの事例について述べた。これにより、教師による会話データ収集・分析・教材開発・授業実践・実践研究といった「研究と実践の連携」が、学生による会話データ分析・自身の会話の実践と振り返り・改善といった「研究と実践の連携」に繋がっていたことを示した。そして、学生が会話データ分析の手法を学ぶことで、日常生活の中で会話を観察していく分析的な視点を持ち、自身の会話に活かそうとしている様子も述べた。

今後の課題は、より多様な会話データを収集し、学生が分析できるような教材を開発していくことである。例えば、本教材は、日本語の会話データだけであったが、外国語の会話データも収集して、日本語の会話と比較分析できるようにすることも考えられる。あるいは、学生にとって身近な日常の場面だけでなく、知識としては知っているが実際にあまり参加したことがない場面（例：介護、法廷等）もデータとして分析していけるようにすることも、社会の中の様々な会話について考えるという点で有益だと言えよう。今後も、会話データ分析をもとにした、教師と学生による「研究と実践の連携」が盛んに起こり、学生が自身の日常の会話を見つめなおし、大学生活や社会生活に活かせるようになることを願う。

謝辞

本稿は、2016～2018年度科学研究費（基盤研究（C））「会話データ分析の手法を用いたインターアクション能力育成のための教材開発」（16K02800、研究代表者：中井陽子）、および、2019～2022年度科学研究費（基盤研究（C））「インターアクション能力育成のための会話データ分析の手法を学ぶ教材開発とその検証」（19K00702、研究代表者：中井陽子）の研究成果の一部である。また、本稿の内容は、社会言語科学会第46回大会ワークショップ「会話データ分析の教材開発と授業実践を考える－教師と学生による「研究と実践の連携」の可能性－」（2022年3月5日オンライン開催）において発表および議論したことをもとにしている。本稿執筆のためにご協力くださった皆さまに厚くお礼を申し上げます。

参考文献

- ウィモンサラウォン, アバポーン・中井陽子 (2017)「誘いの会話における言いさし発話の分析－日本語母語話者によるロールプレイをもとに－」『日本語教育研究』, 40 : 141-160.
<http://dx.doi.org/10.21808/KJJE.40.09> (2022.11.1)
<http://www.kaje.or.kr/html/sub04-04.asp> (2022.11.1)
- 大野陽子 (2001)「初級日本語学習者の「聞き返し」のストラテジーと日本語母語話者の反応」『三重大学留学生センター紀要』, 3 : 83-92.
- 大場美和子 (2012)『接触場面における三者会話の研究』ひつじ書房
- 大場美和子 (2013)「会話データ分析論文を活用した日本語教員養成課程の授業実践の分析－接触場面におけるコミュニケーション行動の問題を対象に－」『広島女学院大学国語国文学誌』, 43 : 1-14.
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hju/metadata/12266> (2022.11.1)
- 大場美和子 (2019)「介護技術講習会における介助の談話の構造と日本語の問題の分析－EPA 介護福祉士候補者を対象に－」『社会言語科学』, 22 (1) : 107-124.

- https://www.jstage.jst.go.jp/article/jajls/22/1/22_107/_article/-char/ja/
- 大場美和子 (2021a) 「母語場面における二者と三者の初対面会話の話題開始と情報交換の分析 — 会話データ分析の手法を学ぶ教材開発をめざして —」 『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』, 15 : 1-15.
<http://id.nii.ac.jp/1203/00006754/> (2022.11.1)
- 大場美和子 (2021b) 「日韓接触場面における二者と三者の初対面会話の話題開始と情報交換の分析 — 会話データ分析の手法を学ぶ教材開発をめざして —」 『日本語教育研究』, 55 : 67-84.
<http://www.kaje.or.kr/html/sub04-04.asp> (2022.11.1)
- 大場美和子・中井陽子 (2020) 「会話データ分析の初学者による話題区分の特徴の分析」 『社会言語科学』, 22 (2) : 62-77.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jajls/22/2/22_62/_article/-char/ja/ (2022.11.1)
- 奥山洋子 (2005) 「話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジー比較 — 日本と韓国の大学生初対面会話資料を中心に —」 『社会言語科学』, 8 (1) : 69-81.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jajls/8/1/8_KJ00008440091/_article/-char/ja/ (2022.11.1)
- 尾崎明人 (1992) 「聞き返しのストラテジーと日本語教育」 カッケンブッシュ他 (編) 『日本語研究と日本語教育』, 251-263, 名古屋大学出版会
- 尾崎明人 (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー — 「聞き返し」の発話交換をめぐる —」 『日本語教育』, 81 : 19-30.
- 尾崎明人 (2001) 「接触場面における在日ブラジル人の「聞き返し」とその回避方略」 『社会言語科学』, 4 (1) : 81-90.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jajls/4/1/4_KJ00008439843/_article/-char/ja (2022.11.1)
- 尾崎明人・椿由紀子 (2001) 「電話会話における初級日本語学習者の「聞き返し」と「聞き返し」回避」 『名古屋大学日本語・日本文化論集』, 9 : 25-45.
- 許挺傑 (2013) 「接触場面における日本語学習者の聞き返し連鎖についての一考察 — 聞き返し連鎖定義の再検討と学習者の使用実態 —」 『筑波応用言語学研究』, 20 : 16-29.
<http://hdl.handle.net/2241/120646> (2022.11.1)
- 佐藤茉奈花・夏雨佳・中井陽子 (2022) 「日中初対面接触場面の二者会話と三者会話に関する事例分析 — 話題開始の発話とフォローアップ・インタビューから見る非母語話者の理解・参加の比較 —」 『社会言語科学』, 24 (2) : 21-36.
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析 — 勧誘のストラテジーの考察』 くろしお出版
- 寅丸真澄 (2017) 『学習者の自己形成と自己実現を支援する日本語教育』, ココ出版
- 寅丸真澄 (2020) 「インターンシップ場面におけるコミュニケーション・ストラテジー使用に関する一考察 — 中国人日本語学習者によるロールプレイ会話の質的分析から —」 『韓国日語教育学会 2020 年度国際學術大會 (第 37・38 回)』, 119-124.
- 寅丸真澄 (2022) 「インターンシップ面接場面におけるコミュニケーション・ストラテジー使用に関する一考察 — 中・上級日本語学習者の「聞き返し」の質的分析から —」 『日本語教育研究』, 58 : 19-35.
<http://dx.doi.org/10.21808/KJJE.58.02> (2022.11.1)
<http://www.kaje.or.kr/html/sub04-04.asp> (2022.11.1)
- 寅丸真澄・饗場淳子・作田奈苗 (2020) 「短期ビジネス日本語プログラムにおける Project-Based Learning の意義と可能性 — 体験による学びとキャリア支援という二つの観点から —」 『BJ ジャーナル』, 3 : 16-29.
http://business-japanese.net/journal/BJ003/3_2.pdf (2022.11.1)
- 中井陽子 (2002) 「初対面母語話者／非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現と会話の理解・印象の関係 — フォローアップ・インタビューをもとに —」 『群馬大学留学生センター論集』, 2 : 23-37.
- 中井陽子 (2008) 「会話教育のための会話分析と実践の連携」 『日本語学 特集：話し言葉の日本語』, 臨時増刊号, 27 (5) : 238-248.
- 中井陽子 (2009) 「会話を分析する視点の育成 — コミュニケーション能力育成のための会話教育が行える日本語教員の養成にむけて —」 『大養協論集 2008』, 55-60.
<https://daiyokyo.files.wordpress.com/2022/08/e4b8ade4ba95efbc882008efbc89.pdf> (2022.11.1)

- 中井陽子 (2010)「第2章作って使う 第1節モデル会話を作成して用いる」尾崎明人・椿由紀子・中井陽子 (著), 関正昭・土岐哲・平高史也 (編), 『日本語教育叢書「つくる」会話教材を作る』, 40-79, スリーエーネットワーク
- 中井陽子 (2012) 『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』 ひつじ書房
- 中井陽子 (2017a)「誘いの会話の構造展開における駆け引きの分析—日本語母語話者同士の断りのロールプレイとフォローアップ・インタビューをもとに—」『東京外国語大学論集』, 95 : 105-125.
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/89930> (2022.11.1)
- 中井陽子 (2017b)「会話の種類による参加者の配慮の違い—体験談の会話・スピーチ・話し合いの分析をもとに—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』, 9 : 46-54.
<http://academicjapanese.jp/dl/ajj/ajj9.46-54+.pdf> (2022.11.1)
- 中井陽子 (2018a)「会話データ分析の手法を学ぶための授業実践—学部生の学びの分析からの考察—」『東京外国語大学論集』, 97 : 203-225.
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/92837> (2022.11.1)
- 中井陽子 (2018b)「インタビュー会話の分析活動から学ぶより良いインタビューの方法—会話データ分析の手法を学ぶ学部授業での実践をもとに—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』, 10 : 36-44.
<http://academicjapanese.jp/dl/ajj/ajj10.36-44.pdf> (2022.11.1)
- 中井陽子 (2019)「日本人学部生によるインタビュー会話における聞き手の技能—印象評価・会話データ分析・フォローアップインタビューをもとに—」『東京外国語大学論集』, 98 : 73-101.
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/93954> (2022.11.1)
- 中井陽子 (2020)「話し合いの会話データ分析活動における学び—日本人学生と外国人留学生が参加する学部授業の分析—」『東京外国語大学論集』, 101 : 73-93.
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/95717> (2022.11.1)
- 中井陽子 (2021a)「話し合いの仕方の変遷プロセスの分析—中国人日本語学習者を対象としたオンライン授業を対象に—」『東京外国語大学論集』, 102 : 99-110.
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/106518> (2022.11.1)
- 中井陽子 (2021b)「キャリア形成と人間関係構築のための授業実践—2019年度中国赴日本国留学生予備教育における団長授業での試み—」劉桂萍 (主編)・辺家勝 (副主編) 『日本語教育論集』 国際シンポジウム篇, 9 : 84-108, 中国赴日本国留学生予備学校日本語教育研究会, 東北師範大学出版社
- 中井陽子・赤木美香・王婷婷 (2015)「会話データ分析による「研究と実践の連携」の意識化の試み—大学院日本語教員養成課程の演習を例に—」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』, 11 : 1-14.
<https://daiyokyo.files.wordpress.com/2015/03/nakai.pdf> (2022.11.1)
- 中井陽子 (編著)・大場美和子・寅丸真澄・増田将伸・宮崎七湖・尹智鉉 (著) (2017) 『文献・インタビュー調査から学ぶ会話データ分析の広がり軌跡—研究から実践まで—』, ナカニシヤ出版
- 中井陽子・大場美和子・寅丸真澄 (2022) 『会話データ分析の実際—身近な会話を分析してみる—』, ナカニシヤ出版
- 中井陽子・夏雨佳 (2021)「談話技能教育における「研究と実践の連携」の循環プロセス—中国人日本語学習者と日本人学生が参加するオンライン会話倶楽部の活用を当てて—」『東京外国語大学国際日本学研究』, 創刊号 : 84-102.
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/100121> (2022.11.1)
- 南不二男 (1972)「日常会話の構造—とくにその単位について」『月刊言語』, 1 (2) : 108-115.
- 三牧陽子 (1999a)「初対面インターアクションにみる情報交換の対称性と非対称性—異学年大学生間の会話の分析—」吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会 (編) 『日本語の地平線 吉田彌壽夫先生古稀記念論集』, 363-376, くろしお出版
- 三牧陽子 (1999b)「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析—」『日本語教育』, 103 : 49-58.
- 楊虹 (2005)「中日接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して—」『言語文化と日本語教育』, 30 : 31-40.
https://teapot.lib.ocha.ac.jp/record/38734/files/04_031-040.pdf (2022.11.1)

吉田悦子・大場美和子（2020）「中国人技能実習生が就労する養鶏場で語られた問題の分析—日本人雇用者・従業員のインタビューにおける言語的特徴に着目して—」 秦かおり・村田和代（編）『ナラティブ研究の可能性—語りが写し出す社会』, 25-48, ひつじ書房

（なかい ようこ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授）

（おおば みわこ 昭和女子大学人間文化学部 准教授）

（とらまる ますみ 早稲田大学日本語教育研究センター 准教授）

Development of Teaching Materials and Teaching Practices for Learning the Methods of Conversation Data Analysis:

The Possibilities of ‘Linking Research and Practice’ by Teachers and Students from the View Point of “The Practice of Conversation Data Analysis: Analyzing Conversations around You”

NAKAI Yoko, OHBA Miwako and TORAMARU Masumi

KEYWORDS: Conversation data analysis, Development of material, Teaching practice, ‘Linking research and practice’, Teachers and students

In this paper, the authors discuss the development process and teaching practices involved in using the teaching material “The Practice of Conversation Data Analysis: Analyzing Conversations around You” (Nakai et al. 2022), which teaches the methods of conversation data analysis, from the perspective of the possibilities of ‘Linking research and practice’ by teachers and students. In particular, the authors report the following four cases of the development of teaching materials and attempts at teaching practices at undergraduate and graduate schools and Japanese classes, which serve as examples of the process of ‘Linking research and practice’ by teachers and students based on conversation data analysis.

- (1) Conversation data analysis of first-time meeting native language situation
- (2) Conversation data analysis of an invitation
- (3) Conversation data analysis of an interview
- (4) Graduation thesis guidance using the methods of conversation data analysis

Based on these reports, the authors demonstrate that the teachers’ “Linking research and practice” (e.g., conversation data collection, analysis, teaching material development, teaching practices, and practical research) did connect to the students’ “Linking research and practice” (e.g., conversation data analysis, practice, reflection, and improvement of their own conversations). It is also shown how the students, by learning methods of conversation data analysis, acquired an analytical viewpoint from which to observe conversations in their daily lives, and actively tried to make use of them in their own conversations. Finally, the authors mention the potential issues that could arise in developing teaching materials for learning conversation data analysis in the future.